

小林正人(1957-)は、およそ40年にわたる独特な制作の試みを通して絵画の在り方を探求し、観る者に深く問いかけ続けている作家です。1980年代の「絵画の復権」と称される潮流の中にありながら、枠に張られた白いキャンバスを常に既に一つの限定として捉えた小林は、「復権」の先、「まったくのゼロから始める」新しい手法を独自に探求していきました。

それはきわめてラディカルな試行です。小林は、筆ではなく手に絵具をつけ、キャンバスを木枠に張りながら同時に塗りこめていくのです。常に生乾きのキャンバスを抱えるように両手で挟みながら絵の具をすりこみ、フレームに張っていくことでイメージと空間が同時に生成され続けます。このプロセスがすべてともに進行し、一致して完成すること。「平面に張られた白いキャンバスの前に立って描くのでは遅い」と言うように、遅れて現れる代理としてのイメージではなく、それ自体が十全なものとして生成する絵画こそ、小林が新しい絵画として措定したものです。

《絵画》では、2枚のキャンバスと2人の人物がいわば一体化し、絵画と身体とが合一するようなヴィジョンが、充実をもって感得できます。《Unnamed #18》では作家の手法はより深化し、形の上でも従来の「絵画」から大きな逸脱をみせています。その一方で、油彩画特有の鮮やかな色彩や質感、木枠とキャンバスの緊張をはらんだ合一は必然性を感じさせません。キャンバスの限定性を超える試みがこのような形に結実することには驚きを禁じ得ないでしょう。“このように在る”絵画として空間に強く働きかけ、観る者に迫ってきます。近年のシリーズである《この星》の2点は、ここでは高々と掲げられ、伸びやかな空間をひらいています。《この星へ#2》の、光の矢にまたがるモデルの女性が伸ばした手は、小林の獲得した、限定を逃れた自由な絵画が伸ばした手であるはずで



小林正人《Unnamed #18》2000年

*企画展「百年の編み手たち—流動する日本の近現代美術—」展示風景(2019)

KOBAYASHI Masato, *Unnamed #18*, 2000

*Installation view, "Weavers of Worlds – A Century of Flux in Japanese Modern / Contemporary Art", 2019